

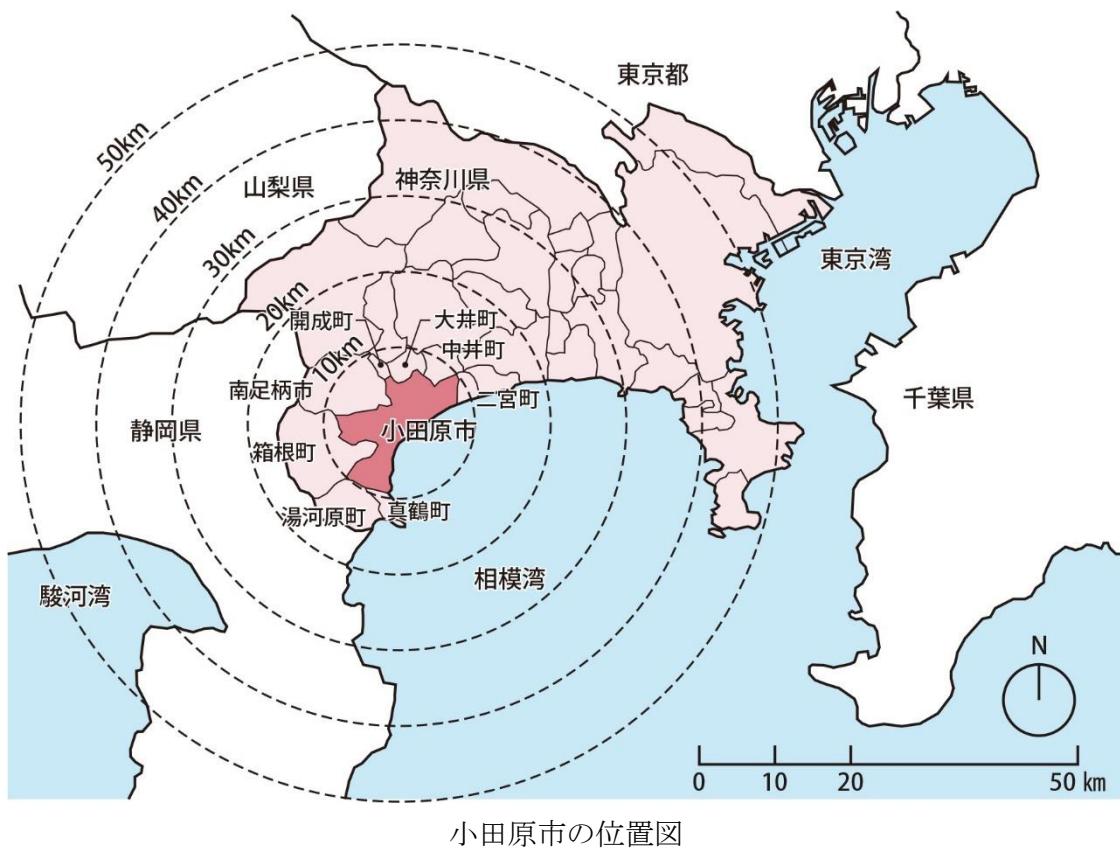
第1章 小田原市の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は神奈川県の南西部に位置します。市域は、東西 17.5km、南北 16.9km、面積は県全体の 4.7%に当たる 113.60km² (11,360ha) で、横浜市、相模原市、川崎市に次いで県内 19 市中 4 番目の広さを有しています。

市庁舎の位置は、北緯 35 度 15 分 53 秒、東経 139 度 9 分 08 秒（世界測地系）です。市域の南西部は真鶴町・湯河原町・箱根町、北部は南足柄市・開成町・大井町、東部は中井町・二宮町にそれぞれ接しています。本市は、湘南地域の西側に位置するこれら県西地域の中核的な都市として、16 世紀以降、小田原城と小田原宿を中心に発展してきました。



(2) 地形・地質

本市域の地形は、大きく東部の丘陵地、西部の山地、中央部の平野の三つに区分されます。

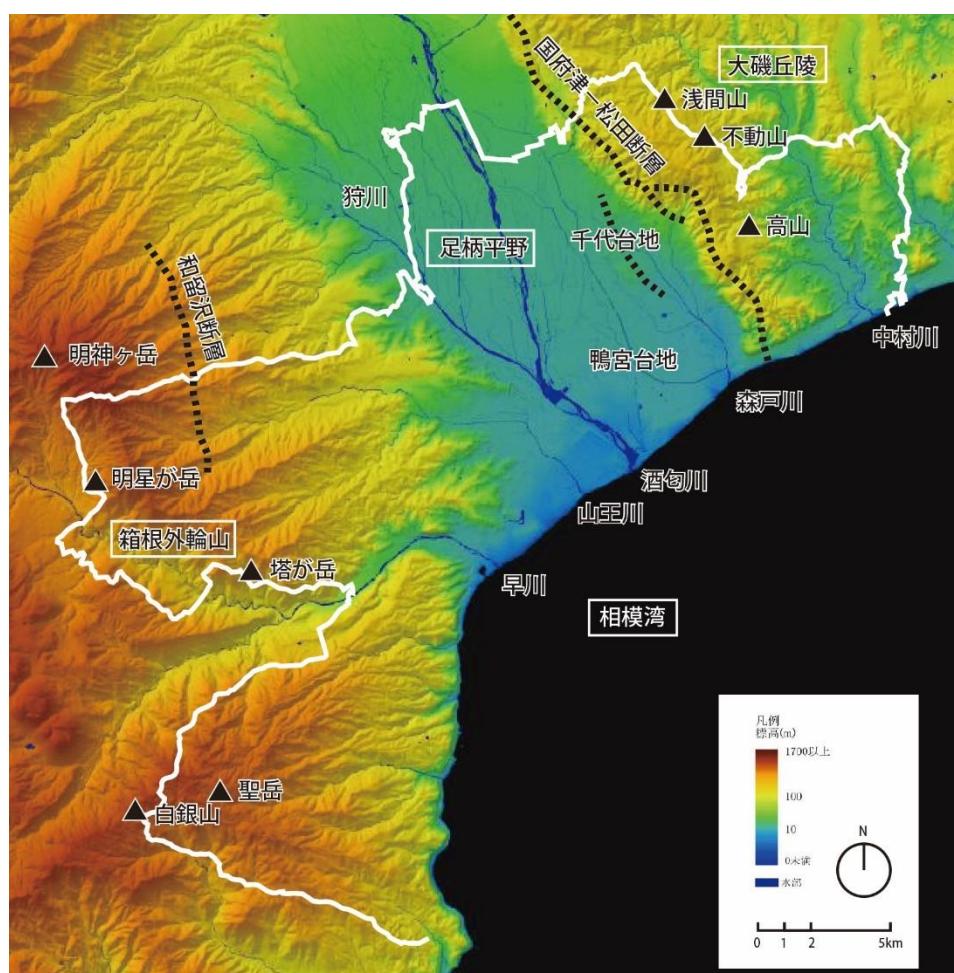
東部の丘陵地は、本市の北東側に接する松田町、大井町から続く大磯丘陵の南西部にあたります。北から浅間山(317m)、不動山(328m)、高山(245m)などの峰が連なり、曾我山とも呼ばれています。国府津—松田断層の活動により隆起してできた丘陵で、国府津—松田断層が延びる丘陵西縁部と後述する中央部の足柄平野との境界線は直線状で、急傾斜地となっています。この丘陵地をつくる地層は、主に 100 万年前より新しい時代に古相模湾内湾の海底

第1章 小田原市の概要

や、古酒匂川の河口付近で堆積したものです。

西部の山地は、箱根外輪山の南東部にあたります。明神ヶ岳南東部の峰（1,030m）、明星ヶ岳（924m）、塔ヶ岳（566m）、白銀山（993m）、聖岳（838m）などの峰々から放射状にくだる急傾斜の尾根と谷、そしてその山麓に広がる台地からなります。箱根外輪山は、約40万年前から13万年前に噴出した溶岩と火碎物（噴火により噴出された溶岩流以外の噴出物の総称）で形成されています。山麓の台地は、約6.6万年前の爆発的な噴火により噴出した東京軽石流とよばれる火碎流堆積物（火碎流に運ばれてできた堆積物）によってできています。また、狩川と山王川に沿って河岸段丘があります。それらの台地の上には、箱根火山や富士火山の噴火による火碎物が降り積もってできた関東ローム層という赤褐色の地層がみられます。

中央の低地は、丹沢山地、富士山、箱根火山から酒匂川等により運ばれた砂や礫が集積してできた扇状地性の足柄平野です。足柄平野内にも火碎流堆積物がつくった千代台地、約2,900年前に発生した富士火山の岩屑なだれ堆積物がつくった鴨宮台地、酒匂川に沿ってできた自然堤防などの微地形が発達しています。

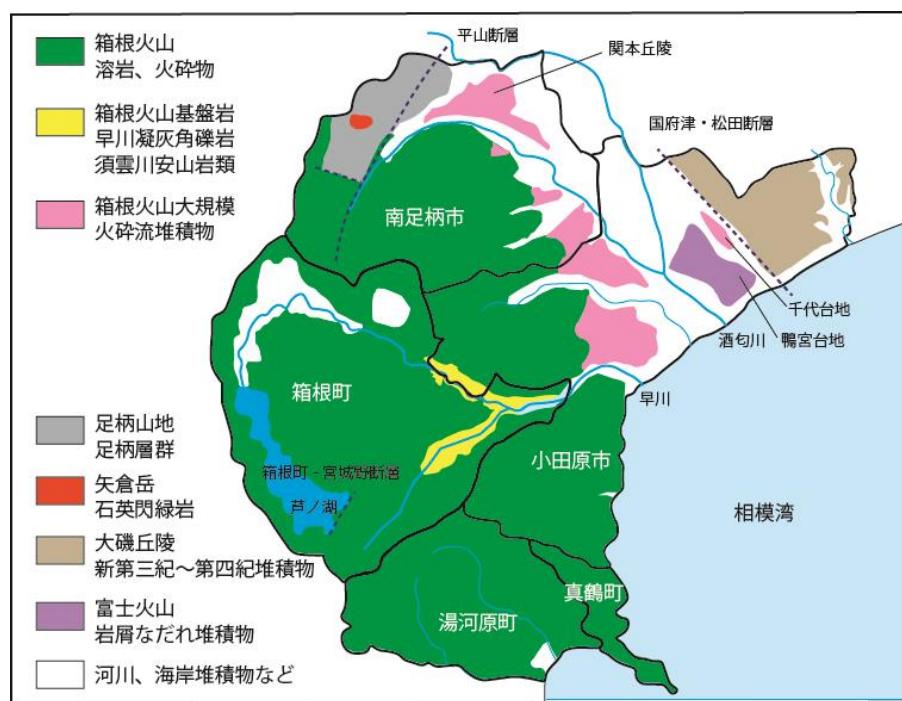


小田原市の標高図（国土地理院電子国土 Web より）

箱根火山のふもとに広がる2市3町（小田原市、南足柄市、箱根町、真鶴町、湯河原町）は、箱根ジオパークを構成しています。箱根ジオパークは、プレート境界という特異な場所に形成された箱根火山と周辺の地形・地質を大切に守りつつ、国際的な観光に活用し、併せて地域の教育、産業、防災などにも役立つ取組みを目指して活動しています。火山体を深く削って流れる河川は渓谷をつくりだし、箱根火山が面する相模湾沿岸は、魚種も豊富で古くから漁業が盛んです。一方、山間部にはハコネの名がつく動植物など、固有種も見られ、豊かな自然環境に恵まれています。この地域に所在する温泉は、古くから知られ、人々は火山の恵み、いわゆるジオの恵みを享受しています。



箱根ジオパークを構成する2市3町

箱根ジオパーク地域の地形と地質
(箱根ジオパークホームページより)

(3) 水系、伏流水

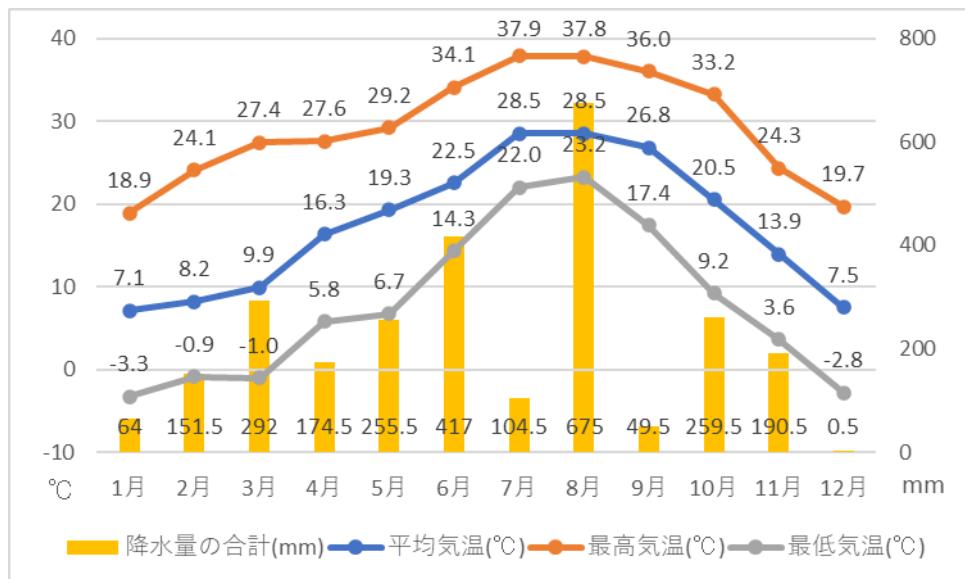
本市を流れる主な河川に、東から中村川、森戸川、酒匂川とその支流の狩川、さらに山王川、早川があり、その他に、大磯丘陵や箱根火山から流れる小河川があります。酒匂川は富士山東麓、早川は芦ノ湖、山王川は箱根外輪山の明星ヶ岳を水源としています。

足柄平野は、水を通しやすい性質を持つ扇状地性の平野で、地下には良質な地下水が貯えられており、周辺に湧水地を形成しています。

(4) 気象

本市の気温は、相模湾に流れ込む黒潮（日本海流）の影響を受け、年平均 17.4°C（令和6年（2024））と比較的温暖で、夏は涼しく冬は暖かい気候となっています。また、年間降水量は 2,634.0mm（令和6年（2024））で、全国的にも多い方です。これには、南側に相模湾を臨み、東・北・西の三方を高い山や丘陵に囲まれている本市の地形が大きく影響しています。また、降水量を年間を通してみると、夏は多く、冬は少なくなっています。風向きは、海岸の影響で南風が多いですが、冬季から春先にかけては北風と西風が多いです。強い西風は箱根おろしと呼ばれ、湿度も低くなります。

こうした温暖で湿潤な気候は、生活に快適さをもたらすだけでなく、丘陵部における梅や、みかんなどの柑橘栽培、平野における水稻栽培など、様々な農業生産を支える前提となっています。



小田原市の気温と降水量（令和6年（2024））（気象庁ホームページより）

2 社会的状況

(1) 「小田原」の地名の由来について

この地が「小田原」となった由来については明らかにされていません。

確実な史料で確認できるのは、嘉元3年（1305）と推定される称名寺文書「某書状」にみられる「をたはら」です。同時期の史料である、延慶3年（1310）頃成立の『夫木和歌抄』にも「海道宿次百首　をたはら 参議為相卿」として収録されており、14世紀初頭には「小田原」の地名が誕生していたと考えられています。

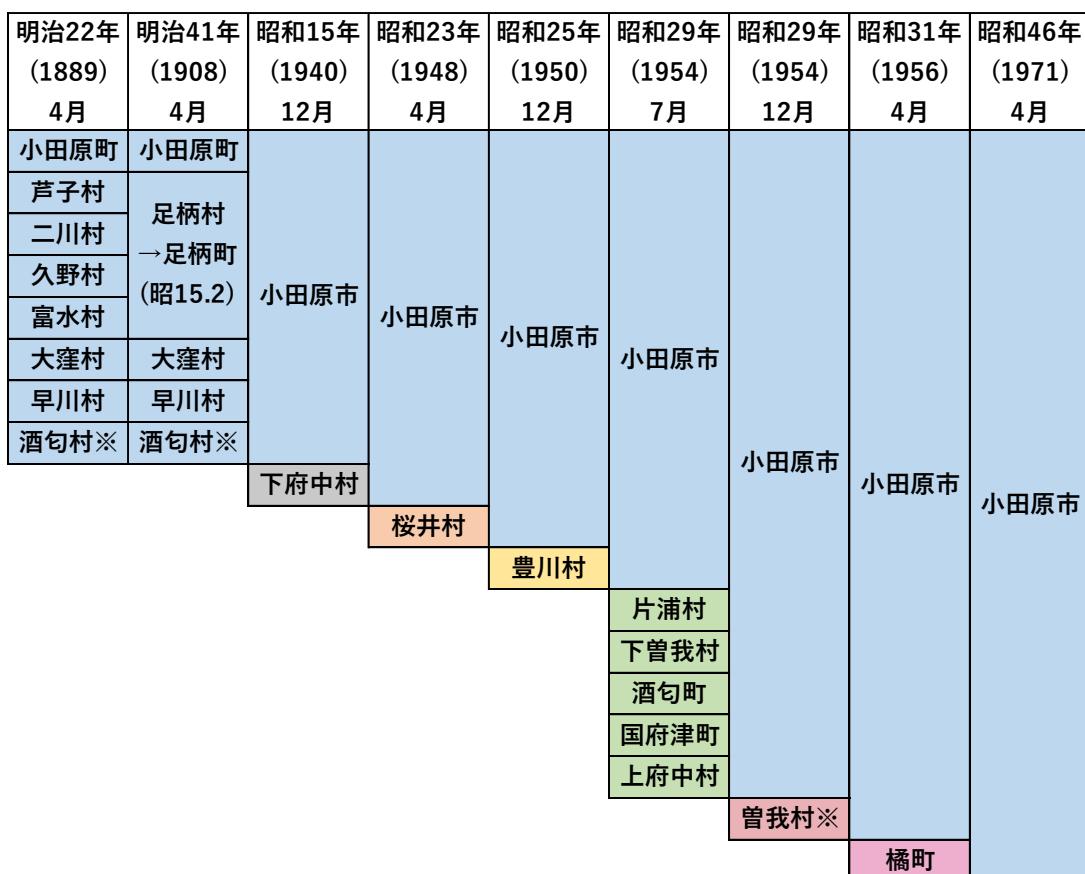
(2) 市の合併経緯

明治22年（1889）の町村制施行により、本市の前身となる小田原町及び周辺の21村ができました。明治41年（1906）に芦子村、二川村、久野村及び富水村が合併して足柄村となりました。その後、昭和15年（1940）2月に足柄村が町制施行により足柄町となったのに続き、同年12月に足柄町と大窪村及び早川村並びに酒匂村の一部が合併し、同時に市制を施行して本市が誕生しました。その後も周囲の町村との合併は進められ、昭和46年（1971）の橘町との合併により、現在の市域が確定しました。

平成12年（2000）には特例市へ移行しました。なお、平成27年（2015）に特例市制度は廃止され、現在は施行時特例市となっています。

小田原市の合併の経緯

※は村域の一部が小田原市に合併

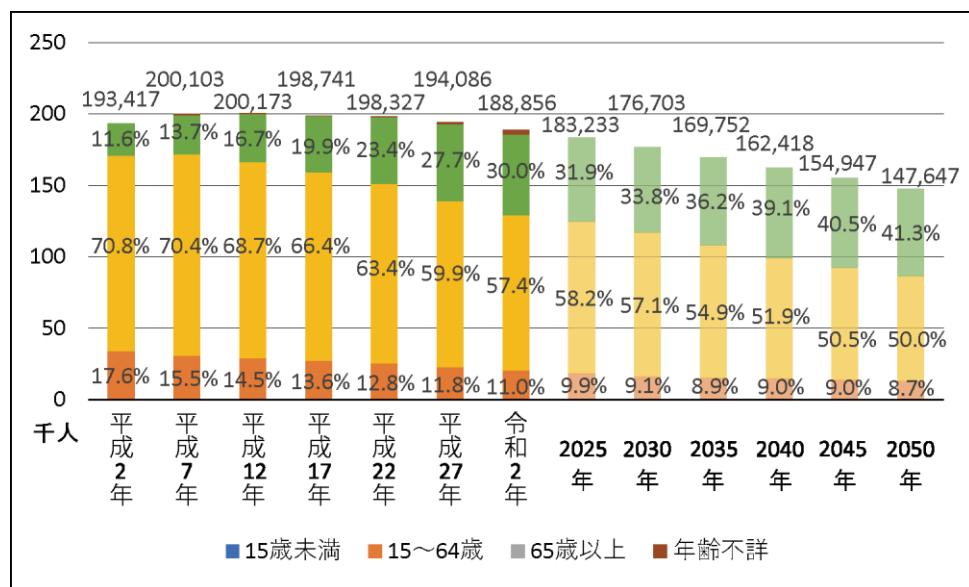


(3) 人口推移

本市の人口は、令和7年（2025）8月末現在で185,027人です。人口の推移をみると、平成7年（1995）の調査で20万人に達しましたが、平成12年（2000）をピークとして減少傾向にあります。令和2年（2020）は、188,856人でした。

人口の年齢構成は、年少人口（15歳未満）と生産人口（15～64歳）の割合が減少している一方で、老人人口（65歳以上）の割合が急速に増加しています。

国立社会保障・社会人口問題研究所の推計によると、今後も人口減少・少子高齢化が進展することが想定されており、2050年には人口15万人を切ることが予測されています。



市内の人口の推移

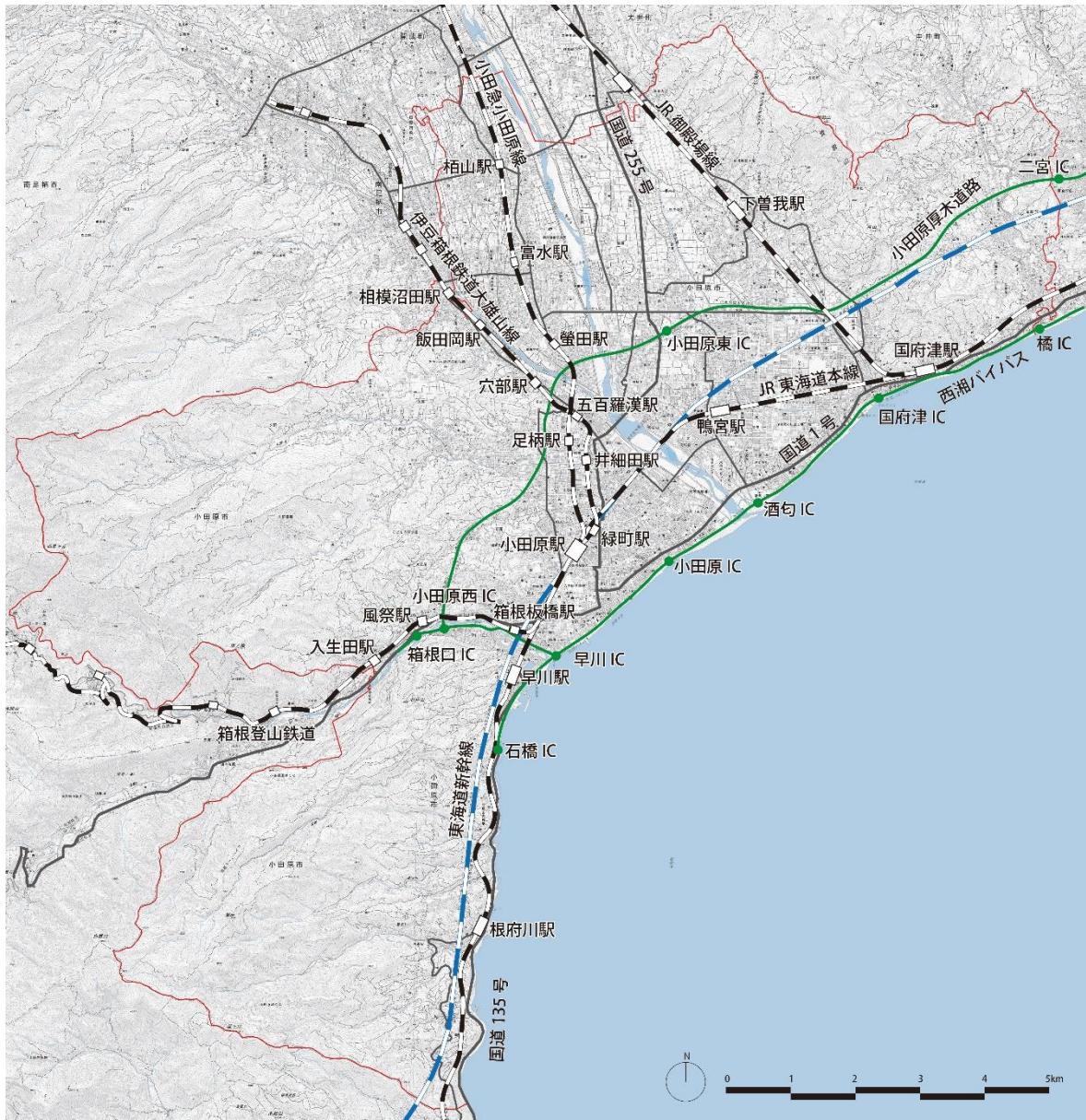
（「国勢調査」（総務省統計局）（令和2年まで）、「日本の地域別将来推計人口（令和5（2023）年推計）」（国立社会保障・人口問題研究所）（2025年以降）より）

(4) 交通

道路は、東西方向に国道1号や国道135号、小田原厚木道路、西湘バイパスなど、南北方向に国道255号や県道74号などが整備されています。

鉄道は、JR東海道本線・JR東海道新幹線・JR御殿場線・小田急小田原線・小田急箱根鉄道線（箱根登山線）・伊豆箱根鉄道大雄山線の6路線があり、市内に18の鉄道駅を有しています。特に大正9年（1920）に開設された小田原駅は、現在、JR御殿場線を除く5路線が乗り入れ、県西地域の中心駅となっています。

路線バスは、小田原駅を起点とする路線を中心に箱根登山バス・伊豆箱根バス・富士急モビリティ・神奈川中央交通の4社が運行しています。



公共交通網図

(5) 産業

本市の産業種別の特徴として、県内他市町村に比べ、伝統產品を含む水産加工業や木工業などの製造業、宿泊業・飲食サービス業の割合が比較的高い点があげられます。また、近年は第一次産業が減少していますが、豊かな自然環境を活かした、漁業や農業などの第一次産業も盛んで、干物・かまぼこ・梅干しなどの地場産業を支えています。

①漁業

小田原は、定置網漁業地として知られており、その中心的な漁場は石橋や米神です。小田原の漁業は、江戸時代後期とされる定置網の導入以前から着実に発展していたと考えられ、江戸時代初期には海岸沿いの早川・山王原・酒匂・小八幡等の村々に藩から舟役が課せられ

第1章 小田原市の概要

ていました。また、寛文 12 年（1672）に四艘張網・海老網・鰯網・棒受網・鯛長縄・ぼら網など張網漁業の記録があります。大正時代には、小田原町の産業の中で水産業が第 1 位の産額を占めるほど、活況を呈しました。

漁獲量の増加に伴い、かまぼこや塩辛が製造され、小田原宿内の名物として知られていますが、これらの製造に地元産の塩が用いられたと考えられます。

②農業

小田原市の農業は、梅やみかん、水稻の栽培に代表されます。梅は北東部にある曾我梅林の周辺、みかんは西部の箱根外輪山東麓の片浦や早川、東部の大磯丘陵周辺の曾我や国府津などで栽培されています。また、水稻は神奈川県下有数の米どころである酒匂川下流の平野で栽培されています。

③伝統産業

戦国時代、城下町の発展に伴って職人が小田原に多く来往し、彼らが伝えた技術によって、小田原物と呼ばれる茶湯釜の小田原天命や甲冑の小田原鉢などの工芸品が生まれました。

その中には今日まで伝えられ、小田原漆器や小田原鋳物など小田原固有の伝統技術と文化を象徴する物産となっているものもあります。

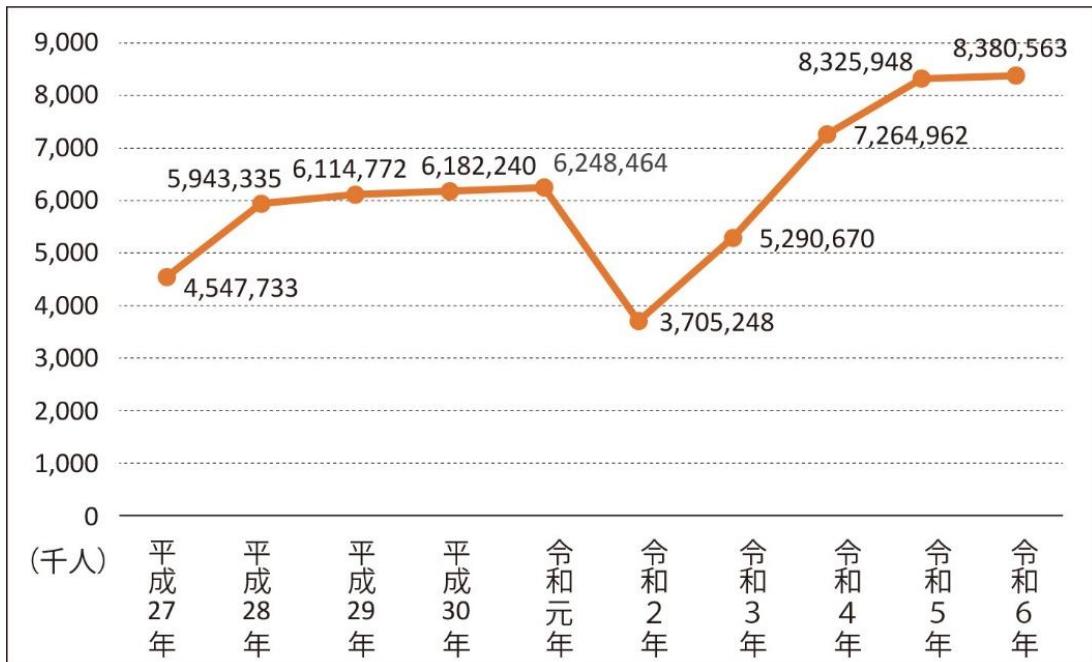
（6）観光

本市は東京都心部から南西へ約 70km の距離にあり、東京都心や首都圏の主要都市、周辺の観光地（横浜、箱根、鎌倉、湘南、富士、伊豆など）からの交通アクセスが良く、多くの観光客が訪れています。最も知名度の高い観光資源は小田原城で、その他にも、歴史や伝統、なりわいなどに関する多くの観光資源があります。

本市の観光入込客数は、平成 28 年（2016）に小田原城天守閣のリニューアル等が行われ、平成 30 年（2018）に日本遺産「旅人たちの足跡残る悠久の石畳道—箱根八里で辿る遙かな江戸の旅路—」が認定されて、近年、観光客数は増加傾向にあり、平成 29 年（2017）には 600 万人を超えるました。しかし、新型コロナウィルス感染症の影響により、令和 2 年（2020）には約 370 万人へと激減しました。

その後、観光客数は回復し、令和 6 年（2022）には 8,380,563 人と、過去最高の観光客が訪れています。

施設ごとの統計では、小田原城址公園に多くの観光客が訪れており、他の施設や地域への波及効果が期待されます。



観光客数の推移（「神奈川県入込観光客調査」より）

主な施設・行事ごとの観光客数の推移（「神奈川県入込観光客調査」より）（単位：千人）

施設等名称		平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年
施設	小田原城天守閣	282	605	876	629	625	302	294	568	*	*
	生命の星・地球博物館	295	310	301	310	326	156	127	225	250	271
	小田原フラワーガーデン	222	229	242	244	215	159	178	206	267	181
	小田原文学館	9	10	8	8	8	3	4	5	6	6
	尊徳記念館	11	12	12	10	10	4	4	7	6	8
	なりわい交流館	34	38	37	43	41	24	28	43	41	32
	松永記念館	25	21	21	22	20	4	8	14	16	19
	清閑亭	*	33	34	26	24	11	13	7	-	-
	小田原さかなセンター	345	360	389	373	348	*	*	*	*	*
	漁港の駅TOTO CO小田原	-	-	-	-	75	398	485	645	653	679
地點	鈴廣かまぼこ博物館	*	*	263	284	335	*	106	218	299	298
	小田原城址公園	2,144	3,216	3,238	3,108	3,235	1,339	1,616	2,426	2,780	2,832
	石垣山一夜城	*	*	*	73	79	92	83	82	75	86
	曾我梅林 (小田原梅まつり)	380	456	406	480	400	340	60	238	280	250
行事	長興山紹太寺 (小田原桜まつり)	28	*	30	81	61	14	20	33	57	71

*：掲載無し

※本表は「神奈川県入込観光客調査」より主な施設・行事ごとの観光客数を抜粋して掲載したものであり、各年の合計値と前ページの観光客数は一致しません。

3 歴史的背景

(1) 原始、古代 一小田原の形成ー

<旧石器時代>

本市域で確認されている最も古い遺跡は、旧石器時代のものです。イギリス人医師で考古学者でもあったN・G・マンローは、明治38年（1905）に早川及び酒匂川流域の段丘で採取した数点の遺物を、明治41年（1908）に日本で初めて確認された旧石器時代の資料として学会に発表しました。

このほか、市内では谷津山神遺跡で約18,000年前の旧石器時代末期の石器群がまとまって出土し、小田原城跡御用米曲輪でも20,000年前の石核（石器の素材となる剥片をはぎとった後に残された部分）が出土するなど、市内西部を中心に旧石器時代の遺物が確認されています。

旧石器時代の遺跡は継続性に乏しく、シカなどの獲物を追いかながら移動し続ける遊動的な生活でした。

<縄文時代>

縄文時代の遺跡は、久野をはじめとした市域の丘陵部を中心に確認されています。縄文時代前期に市域東部に形成された羽根尾貝塚は、貝塚の発掘例が少ない相模川以西で発見された3例目の貝塚です。ここでは、イシナギやイルカの骨や貝殻などと共に、関東地方南部の土器に加え、中部地方・東海地方・関西地方で生産された土器、骨角製釣針、漆塗りの木製容器、木製の櫂や弓など、当時の生活や交流を伝える遺物が確認されています。

縄文時代中期には、久野一本松遺跡など丘陵上に大規模な集落が形成されました。

ほかにも、縄文時代の遺跡は荻窪・水之尾・早川・根府川などの市内西部や曾我や千代などの市内東部の丘陵上で確認されています。

これらの遺跡から、狩猟、採集、魚撈による食物獲得と、土器や編物、木製品、漆器といった生産品によって支えられた定住的生活が営まれたことが分かります。ただし、気候の変動に対応するために、集落の場所を変えることもありました。また、土偶などの祭祀に用いられたと考えられる遺物もあり、宗教の萌芽を認めることができます。



縄文時代前期出土品
(羽根尾貝塚出土品)

<弥生時代>

弥生時代の遺跡は、久野・多古・高田・千代・永塚・羽根尾など市内各所で確認されています。このうち、谷津（小田原）遺跡はかつて南関東地方の弥生土器編年の一角落を占めていた小田原式と呼ばれる土器が出土した標識遺跡です。また、弥生時代中期に出現した中里遺

跡は、関東地方における最古級の本格的な弥生時代の集落とされており、本市を代表する遺跡の一つです。

中里遺跡では、弥生時代中期に瀬戸内地方や東海地方で生産された土器が出土し、遠方との交流を示します。また、農具や石斧、炭化米が出土し、土器にもイネ種子の圧痕があることから水田稻作が行われたことが分かります。一方で、狩猟、採集、魚撈も引き続き行われており、食物獲得に多様性が出てきたと言えます。また、墓の規模が大きくなり、葬送に比較的大きな土器を用いるなど日常生活との区別が明瞭となるほか、井戸や鹿の骨角を用いた祭祀の痕跡が認められ、弥生時代ならではの宗教的生活が伺われます。



弥生時代中期出土品
(中里遺跡出土品)

<古墳時代>

古墳時代前期の遺跡は、千代・永塚・高田に位置する台地上や、国府津などで確認されています。このうち、千代南原遺跡は鉄製品を生産しており、高度な技術者をかかえる有力者がいたと思われます。

古墳時代中期の遺跡は、前期に比べ発見された数が非常に少ないですが、久野下馬下遺跡では、くのげばした子持勾玉こもちまがたまが出土したほか、土器やガラス小玉、石製品が大量に見つかっています。



古墳時代前期出土品
(千代南原遺跡出土品)

古墳時代後期の遺跡は、前期と同じような位置にあり、千代・永塚・高田・国府津などで集落が確認されています。加えて、久野丘陵上には古墳群があります。この古墳群は、かつて久野百塚や久野九十九塚とも呼ばれ、120基以上の古墳が存在していたと想定されています。中でも、市指定史跡である久野1号古墳は、神奈川県内では最大級の円墳です。このほか、国府津や小八幡の低地部などで複数の円墳の痕跡が確認されており、田島や羽根尾などの大磯丘陵には、斜面に直接墓室を掘った横穴墓と呼ばれる古墳が分布しています。

人々の生活は、弥生時代に定着した水田経営を基盤とし、集落や墓の規模が弥生時代よりも巨大化し、土木技術の進展が伺えます。身なりを整える装身具となる管玉の生産や鉄製品の生産が本格化するなど、日本列島の広範囲に広がる古墳時代の文化を小田原でも確認することができます。

<古代（奈良、平安時代）>

奈良・平安時代には、市域の大部分は相模國足下郡に属しており、足上郡、余綾郡に及んでいました。多くの遺跡が確認されていますが、顕著に遺跡が展開しているのは、千代・永塚・高田の台地上です。

永塚遺跡及び下曾我遺跡では、多くの墨書き土器が出土し、役所等に關係する儀式の跡があ

る井戸や石敷道路の跡が確認され、この周辺に足下郡の役所である郡家^{ぐうけ}が存在したと考えられています。また、千代の千代寺院跡（千代廃寺）で、塼仏（せんぶつ）（粘土板に浮彫した仏像）や螺髪（らほつ）などの佛教関連遺物、瓦が出土しており、建造物の土台となる版築基壇（はんちくきだん）なども確認されています。

佛教の広がりや役所の設置など、政治的なルールに基づく人々の生活が想定できます。また、寺院の設置に伴い居住域が変化するなど、公的な制度や計画を最優先とする社会の状況を遺跡から伺うことができます。



(千代寺院跡出土品)

（2）中世前期 一小田原の発展－

＜鎌倉時代＞

治承4年（1180）、源頼朝が配流先の伊豆国で挙兵します。しかし、市域南部の早川及び石橋山周辺で平家方の大庭景親らとの合戦に敗れ、真鶴から安房国に逃れました。石橋山合戦と呼ばれるこの合戦で、佐奈田与一義忠とその家臣文三家康が討死し、二人を祀った与一塚と文三堂が、県指定史跡となっています。平家を滅ぼし、鎌倉に幕府を開いた頼朝は、箱根と伊豆山の両権現への二所参詣の途中でしばしばこの地を訪れ、涙を流したと『吾妻鏡』は伝えています。

中村氏・土肥氏・小早川氏・大友氏ら市域に本拠をもつ武士の多くは、頼朝の御家人となり、鎌倉幕府を支えました。その中には、大友氏（のち戦国大名）、小早川氏（のち戦国大名毛利氏の重臣）のように、西国で獲得した所領に拠点を移したものもいます。

鎌倉時代に最も繁栄していたのは酒匂で、幕府の浜辺御所が置かれていました。

鎌倉時代の遺跡は、酒匂北川端遺跡や酒匂北中宿遺跡、高田北之前遺跡や国府津三ツ俣遺跡、小八幡酒匂境遺跡などが確認されています。この時代の文化財として、早川の紀伊神社に、社殿下で出土したという12世紀末～13世紀初頭の中国製青白磁小壺・常滑壺・渥美壺が伝わっているほか、酒匂の大見寺に、徳治3年（1308）銘の宝篋印塔があります。

13世紀中頃、国府津から北西に進み足柄峠（南足柄市）を経由していた東海道は、箱根峠を越えるルートが本道となりました。これに伴い、小田原はこのルートに沿った宿駅として、13世紀末頃に成立しました。

この時代の人々の暮らしは、市内で発見された遺跡が少ないとおり、不明確です。



石橋山古戦場のうち与一塚

＜南北朝時代＞

『太平記』は、康安元年（1361）に関東管領の畠山国清が失脚して伊豆へ逃れる際に、小

田原宿に寄宿したと伝えます。小田原宿は、この頃には宿駅として発展し、小田原が史料に登場する数は酒匂を凌駕しました。

南北朝時代の遺跡は、御組長屋遺跡で14世紀の井戸が確認されています。また、この時代の文化財として、相模型の安山岩製板碑があり、このうち建武5年（1338）銘の国府津の寶金剛寺の1基、文保元年（1317）・元亨2年（1322）の南町の居神神社の2基と小田原城址公園内の1基が市指定の文化財となっています。上輩寺の五輪塔も形態的特徴から南北朝時代と考えられており、仏教思想の広がりを確認することができます。

小田原宿と酒匂宿を中心とした人々の生活の展開と、仏教の広がり、寺社の増加を伺うことができます。



小田原城内大日一尊種子板碑

<室町時代>

関東では、上杉禅秀の乱（応永23年（1416））、永享の乱（永享10年（1438））、結城合戦（永享12年（1440））、享徳の乱（享徳3年（1454）～文明14年（1483））、長享の乱（長享元年（1487）～永正2年（1505））と内乱が続きました。

上杉禅秀の乱の戦功によって大森氏が小田原に進出しました。『鎌倉大草紙』に、享徳の乱の勃発後に大森氏が小田原城を築城したとあり、これが史料上の小田原城の初見です。

また、永享4年（1432）に、関東公方の足利持氏が大森氏に、小田原関所の関賃を鶴岡八幡宮の修理に充てるよう命じており、小田原に関所があったことが分かります。

（3）中世後期 一関東の中心地へー

<歴代城主と小田原城の発展>

明応5年（1496）から文龜元年（1501）までに、伊豆の蘿山城（静岡県伊豆の国市）を拠点としていた伊勢宗瑞（北条早雲）が大森氏に代わって小田原城に進出します。宗瑞は、その後も蘿山に在城し、小田原城には嫡子氏綱を置きました。

2代氏綱は小田原城を本拠とし、大永3年（1523）に苗字を伊勢氏から鎌倉幕府の執権と同じ北条氏に改めました。小田原を本拠と定めた氏綱は、積極的に関東の首府を目指して、小田原の都市整備を進めました。

3代氏康の時代、天文20年（1551）に京都南禅寺の僧東嶺智旺^{とうれいいちおう}は小田原を訪れ、小田原城について「太守の墨、喬木森々、高館巨麗、三方に大池有り。池水湛々、浅深量るべからざるなり」と記しました。三方の大池は近世小田原城の二の丸堀の原形と考えられます。

4代氏政の時代、永禄4年（1561）に長尾景虎（上杉謙信）、永禄12年（1569）に武田信玄の侵攻を受け、この経験から、北条氏は小田原城の拡張工事に着手しました。天正15年（1587）までに、丘陵部に三の丸の新堀が普請され、小田原城の整備拡張が積極的に行われ

ました。

5代氏直の時代、北条氏は下野国、常陸国までその領国を広げました。本能寺の変（天正10年（1582））後、一時は織田領であった信濃国と甲斐国へ侵攻しました。北条氏は、徳川家康と和睦し同盟を結びますが、家康と対立する豊臣秀吉が北条氏と敵対する北関東の諸勢力と結んだため、秀吉との対立関係は複雑なものとなりました。天正15年（1587）に豊臣秀吉との緊張が高まると、北条氏は「相府大普請」を開始し、城下を取り込んだ周囲約9kmの堀と土塁からなる総構を造営しました。これにより、小田原城は中世城郭で最大級の規模となりました。

天正18年（1590）、豊臣秀吉は22万の軍勢を率い関東へと出兵し、小田原合戦が始まりました。4月上旬に小田原城を包囲し、6月に石垣山に本営として石垣造りの城を造営しました。これに対し、氏政と氏直は小田原城に籠城して抗戦しましたが、次々に領内の支城を攻略され、7月5日に氏直が投降して小田原城は開城しました。

＜戦国時代の城下町の特徴＞

東海道の宿駅として成立し発展した小田原は、氏綱による都市整備と小田原城の拡張で城下町としての性格を併せ持つました。当初、その中心は、松原神社門前の宮前と箱根口周辺の今宿を含む、松原神社と居神神社の間の東海道沿いででした。東嶺智旺は「町小路数万間、地一塵無し。東南は海なり。海水小田原の麓を遡るなり」と、このころの小田原の街の景観を記しました。

永禄12年（1569）までに、宮前の東方に新宿が成立しました。新宿は新たに設けられた宿を意味し、宿駅の位置が変わりました。北条氏は朱印を用いた伝馬手形を創出し、小田原を中心とした伝馬制を確立しました。

総構が造営されると、その内側の城と城下町は府内と呼ばれました。

史料上では、宮前に問屋商人、今宿に薬種商、新宿に^{いもじ}鑄物師、船方村と呼ばれた漁師村、西方の大窪（板橋）には石切（石工）や紺屋などの職人が居住していたことが確認できます。

城下の武家地は、江戸時代の町名となりました。山角町に山角氏、上幸田・下幸田・藪幸田に幸田氏、安斎小路に田村安斎、狩野殿小路に狩野氏が屋敷を構えました。戦国時代は、武家地、町人地、寺社境内が入り組んでいたことが分かります。

＜小田原用水（早川上水）の整備＞

早川を水源とし、小田原のまちなかを流れる小田原用水（早川上水）は、日本最古級の上水道と言われています。『東国紀行』の記述から、天文14年（1545）には小田原城下に防火・生活用水を供給していました。

天正18年（1590）の小田原合戦を描く「小田原陣仕寄陣取図」



小田原用水（早川上水）

(山口県文書館蔵) の1枚に、早川から分かれ、総構の中を東海道に沿って流れる小田原用水（早川上水）が見えます。

（4）近世－現在の小田原の礎－

＜江戸時代の小田原城＞

小田原合戦の後、関東地方を領したのは徳川家康です。江戸の西方を守る拠点として位置づけられた小田原城には、家康の重臣大久保忠世が4万5千石で入城しました。

大久保忠世とその子の忠隣は、高石垣を用いた近世城郭へと小田原城を整備しましたが、忠隣が慶長19年（1614）に改易されると、忠世・忠隣が築城した小田原城は破却されました。

大久保氏改易後は、特定の城主は置かれず、幕府城番が小田原城を管理しました。その後、元和5年（1619）に阿部正次が上総国大多喜より5万石で小田原へと入りましたが、元和9年（1623）には武藏国岩槻へと転封となり、再び小田原城は城番が置かれました。寛永9年（1632）に稻葉正勝が下野国真岡より8万5千石で小田原城へ入りました。この時期、早川では寛永の江戸城改修に用いる石垣石の採石が行われていました。

稻葉正勝は、3代將軍徳川家光の乳母春日局の実子で、家光の側近でした。入封して間もなく正勝は、小田原城の改修工事に着手しました。翌年1月には寛永小田原大地震が発災し、小田原城と城下は壊滅的な被害を受けましたが、既に、翌寛永11年（1634）に上洛する徳川家光が宿泊することが決まっていたため、幕府の援助を受けて小田原城の復旧工事を進め、延宝3年（1675）に完了しました。

稻葉氏が3代で越後国高田へと転封すると、貞享3年（1686）に大久保忠朝が下総国佐倉から10万3千石で入封しました。大久保氏復帰後は度重なる災害に相次いで見舞われる中で、小田原城の目立った改修は確認されていません。

＜江戸時代の城下町・宿場町＞

江戸時代の城下町は、戦国時代の町割を継承しつつ、寛永10年（1633）の寛永小田原大地震を経て、再編されました。主な改修箇所は、東海道江戸口の付け替え、大手門の城の南側から東側への移設、山角町と板橋村における寺町の形成などで、これにより職能と身分による住み分けを前提とする、近世城下町の基本的な町割が定まりました。その町域や町割は、ほぼそのままの形で現代まで受け継がれており、現在の小田原の町の礎となっています。

東海道の宿駅制度の整備に伴い、箱根越えを控えた宿場町となり、参勤交代の大名や多くの旅客で繁栄しました。東海道では4番目の規模を誇り、最盛期（天保年間（1830～44））には本陣4軒・脇本陣4軒・旅籠95軒を数えました。小田原



東海道小田原宿絵図
(おだわらデジタルミュージアム)

第1章 小田原市の概要

宿の中心は、町人地19町で、東海道沿いの通り町と呼ばれた9町（新宿町・万町・高梨町・宮前町・本町・中宿町・欄干橋町・筋違橋町・山角町）と、東海道南側の海岸沿いの4町（古新宿町・千度小路・代官町・茶畠町）、東海道を起点として北へ向かう甲州道沿いの6町（青物町・一丁田町・台宿町・大工町・須藤町・竹花町）がありました。

東海道沿いの宮前町から筋違橋町が宿場町の中心で、有力町人が経営する本陣は、宮前町（清水家）、本町（久保田家と片岡家）、欄干橋町（清水家）にあり、旅籠は、欄干橋町、中宿町、本町、宮前町、高梨町に集中していました。町人町には、土産屋や食事・雑貨・衣料・漁屋といった商家が建ち並び、また、大工をはじめ、塗師や建具師、木地師など、北条氏以来の職人も多く居住していました。

宿場の繁栄や定住人口の増加により、食料需要が増大しました。これを支えたのが魚食で、宿場町小田原の発展とともに漁業も発達しました。千度小路周辺は、江戸時代に漁業や廻船業、魚商などが多く居住する場所となり、小田原の漁業の拠点的地域となりました。

＜度重なる災害＞

江戸時代における四度の大地震（寛永10年（1633）、元禄16年（1703）、天明2年（1782）、嘉永6年（1853））と三度の大火灾（享保19年（1734）、文化14年（1817）、慶応3年（1867））により、小田原は大きな被害を受けました。特に、元禄大地震では、小田原城は全壊し、城下町・宿場町もほぼ焼失しました。

酒匂川が、ほぼ現在の流路になったのは文禄年間（1592～1596）で、慶長年間（1596～1615）に堰が開削され、足柄平野の新田開発が本格化しました。元禄大地震の発災から間もない宝永4年（1707）に富士山が噴火し、降灰により河床が上昇したため、翌宝永5年（1708）、宝永8年（1711）など、度重なる水害に悩まされました。幕府は田中休愚に命じて文命堤を築造させ、蓑笠之助は休愚の後を継いで土手を作る工事の中心となりました。これらと併せて、水防の神様である文命宮の設置、水防組合の創設など防災意識を高める事業が行われました。

天保の飢饉の際、小田原藩から飢民救済を命じられたのが二宮尊徳でした。尊徳は被害を受けた地域を回り、報徳仕法により再建を行いました。



小田原城再興天守棟札
(宝永二年) 表面

＜多様な民俗芸能と民間信仰の浸透＞

近世の小田原は宿場町として発展し、人々の往来と共に様々な文化がもたらされ定着しました。相模人形芝居下中座は、関西地方から人形遣いの一行が江戸への旅興行の途中で小竹村の青年にその技法を伝えたのが始まりとされます。小田原囃子は、関東祭囃子に属するもので、葛西囃子が江戸市中に広まり始めた江戸時代の中期、小田原にも伝わり、現在も神社

祭礼や道祖神祭りに彩を添えています。

また、寛文年間（1661～1672）以降、近世的な村落共同体が形成、発展すると、様々な信仰が庶民にまで拡大し、講集団や篤信者が村のあちこちに石造物を造立しました。庚申信仰に基づく庚申塔、惡靈を防塞し、子供達の願望を聞き届けてくれる道祖神などです。道祖神祭りとして、どんど焼き、オカリヤ（お仮屋）、ダンゴ（団子）飾りなどが各地で行われるようになります。



前川の道祖神祭り（向原）

（5）近代－近代都市の形成－

＜藩制から町村制への移行＞

明治3年（1870）、小田原藩は明治政府に廃城願を提出し、天守・門・櫓などが解体されました。翌年の廢藩置県で小田原は小田原県の県庁所在地となり、小田原藩政に終止符が打たれました。同年のうちに小田原県は伊豆国の韭山県と合併して足柄県に改組となり、明治9年（1876）に市域を含む相模国部分が分割され、神奈川県に編入されました。これに伴い、小田原は県庁所在地から解かれました。明治22年（1889）の町村制施行により、旧府内のうち谷津村を除く部分が小田原町となりました。



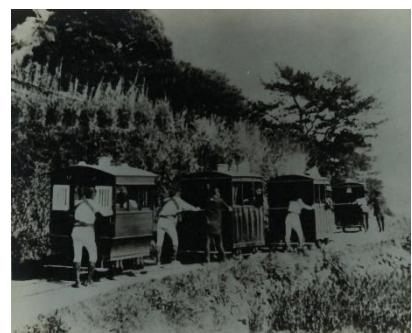
天守解体後の天守台の石垣
(小田原市立中央図書館)

＜近代交通の発展と別邸・別荘地としての繁栄＞

明治20年（1887）、横浜一国府津間に鉄道が開業し、その翌年、国府津一箱根湯本間に小田原馬車鉄道が、明治29年（1896）に熱海方面へ向かう豆相人車鉄道が開業しました。

馬車鉄道が開通した明治21年（1888）の鷗盟館開業を契機に、当時注目されていた海水浴や海岸リゾートのための旅館の開業が相次ぎました。また、明治23年（1890）に伊藤博文の別邸滄浪閣、明治34年（1901）に御用邸、明治39年（1906）に閑院宮別邸、同年頃に旧三井物産の創業者である益田孝（鈍翁）の掃雲台、翌年に山縣有朋の古稀庵、大正13年（1924）頃に三越呉服店（現三越）の社長を務めた野崎廣太（幻庵）など政財界の要人の別邸も数多く建設されました。特に、小田原城二の丸御屋形跡に創設された御用邸は、町の格を高め、その繁栄を後押ししました。

小田原町の玄関であった国府津に、大鳥圭介や、大正天皇の侍従をつとめた加藤泰秋、徳川慶喜、西園寺公望らが来往し、明治41年（1908）に大隈重信が別邸を構えました。



豆相人車鉄道
(小田原市立中央図書館)

大正9年（1920）、熱海線の国府津－小田原間が開通し、東京－小田原間が直通電車で結ばれました。昭和9年（1934）に小田原－熱海－沼津間が全通すると、熱海線は東海道本線に編入され、国府津から御殿場を経由する区間は御殿場線となりました。

＜文学者の来往と交流＞

交通の発展に加え、人々を小田原に惹きつけたのは温暖な気候でした。明治34年（1901）に療養のため小田原に来た斎藤綠雨は、友人への手紙に「山よし海よし天気よし」と記しました。小田原は転地療養や静養にふさわしい気候をそなえており、大正7年（1918）に北原白秋が、翌年に谷崎潤一郎がいずれも家族の健康のため転入するなど、多くの文学者が小田原で創作活動を行い、当地の文学者と交流しました。



北原白秋（白秋山荘にて）
(小田原市立中央図書館)

明治元年（1868）に小田原に生まれた北村透谷は、幼少期に東京へ移りますが、明治26年（1893）に国府津で約4か月の生活を送り、友人島崎藤村の訪問を受けました。大正時代に、民衆詩派と呼ばれた福田正夫ら小田原の詩人は北原白秋と詩論を戦わせ、後年、藤村とともに透谷の文学碑建立に尽力しました。牧野信一の推挙によって文壇に登場した坂口安吾は、当時早川に居を構えていた三好達治に誘われて昭和15年（1940）に近所に移り住み、囲碁仲間でもある尾崎一雄へ自宅からの景色の素晴らしさを伝えました。

（6）現代 一積層する歴史、文化を活かしたまちへー

＜小田原市の誕生＞

昭和15年（1940）、小田原町・足柄町・大窪村・早川村と酒匂村の一部が合併し、小田原市が誕生しました。

その後、昭和23年（1948）に下府中村、昭和25年（1950）に桜井村、昭和29年（1954）に豊川村・国府津町・酒匂町・上府中村・下曾我村・片浦村、昭和31年（1956）に曾我村の一部と合併を重ね、昭和46年（1971）の橋町と合併により現在の市域が確定しました。



市制施行頃の小田原城址公園とお堀端通り（『小田原現勢写真帖』昭和15年）
(小田原市立中央図書館)

＜小田原城の復興＞

小田原城跡は、明治維新後に天守等が解体され、残された石垣も大正12年（1923）9月の

関東大震災によりほぼ全壊し、江戸時代の姿は失われました。

しかし、史跡としての評価が高く、昭和9年(1934)に隅櫓が再建され、昭和13年(1938)には史蹟名勝天然紀念物保存法に基づく史蹟に指定されました。

昭和24年(1949)から始まった地元町内会の天守閣石一積運動を契機に、天守閣復興の動きが活発になり、昭和28年(1953)に天守台の石積工事が完成しました。

次いで、市制施行20周年記念事業として天守閣の復興計画が練られ、現存する小田原城天守模型などを参考に、昭和35年(1960)5月25日、廃城以来90年ぶりに天守閣が復興されました。天守閣の復興に際しても瓦一枚寄付運動などによる市民の力がありました。

その後も小田原城跡では、国指定の史跡として復元整備が進められており、昭和46年(1971)3月に常盤木門が復興されたほか、平成9年(1997)10月に銅門、平成21年(2009)3月には馬出門が復元され、往時の姿をよみがえらせています。



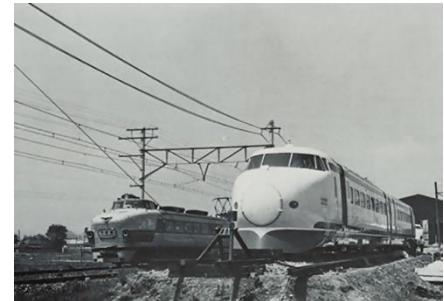
建設中の小田原城
昭和35年(1960)

<歴史都市、観光都市としてのまちへ>

昭和39年(1964)に東海道新幹線が開通し、東京や横浜方面への所要時間が大幅に短縮され、観光とビジネスの両面で市域の経済発展に大きく寄与しました。

東海道新幹線開通に向けて、市域中央部の鴨宮に新幹線試運転のための基地が設けられ、昭和37年(1962)から横浜ー熱海間で走行実験が何度も繰り返されました。既に整備されていた国鉄東海道本線・小田急小田原線・箱根登山鉄道線・伊豆箱根鉄道大雄山線に加えて東海道新幹線が開通し、鉄道5路線が乗り入れる小田原駅は、箱根や伊豆方面への観光客の出入り口としても重要な役割を担っています。

一方、本市では、これまで文化財所管課を中心に小田原城跡などの文化財の保存活用に取り組んできましたが、平成23年(2011)6月に地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律に基づく「小田原市歴史的風致維持向上計画」が認定されたのを機に、文化財をはじめとする幅広い歴史文化遺産の有効活用を視野に入れたまちづくりを推進してきました。また、平成30年(2018)5月24日に小田原市・箱根町・静岡県三島市・函南町に跨る、「旅人たちの足跡残る悠久の石畳道ー箱根八里で辿る遙かな江戸の旅路ー」が日本遺産として認定されたことなどを踏まえ、周辺自治体との連携による広域的な観光資産の運用も図っています。



鴨宮基地で試運転中の新幹線
昭和37年(1962)